

優秀賞

長崎平和宣言を読んで思ったこと

長崎県立長崎北高等学校一年 平畑 葵衣

私は今回、二〇二五年の「長崎平和宣言」を読んで、胸がしめつけられるような気持ちになった。特に心に残ったのは、被爆者の山口仙二さんが一九八二年に国連本部で語った証言の部分だった。彼のまわりに、目の玉が飛び出した人、ガラスや木の破片が刺さった人、そして首が半分切れた赤ん坊を抱いて泣き狂う母親がいたという場面は、文章を読んでいただけなのに頭に強く浮んできて、戦争の残酷さを深く実感した。私は今まで「戦争は悲惨だ」とは知っていたつもりだったが、具体的な状況を知ると、その想像をはるかに超える恐ろしさに言葉を失った。

山口さんが最後に「私の顔や手をよく見てください」と言って世界に訴えた言葉は、ただの意見や主張ではなく、自分の身体に刻まれた体験をもとにした叫びだったと思う。だからこそ、多くの人の心を動かしたのだろう。私はその部分を読んで、「戦争ってこんなにひどいんだ」と改めて感じたし、これを体験した人が生きているうちに、私たち若い世代がしっかりと受け止めて、次の世代へ伝えていかなければならないと強く思った。長崎平和

な」で終わってしまうことが多かったが、これからは「同じ地球市民が苦しんでいる」と考えるようにしたいと思う。

私は正直に言うと、戦争のことを身近に感じる機会は少なかった。祖父母の世代も、戦後に生まれた人が多くなり、直接の体験を聞くことも減っている。だから「戦争を忘れていく」のは避けられないことだと思う。しかし、だからこそ私たちの世代がしっかりと学び、語り継ぐ役割を担わなければならないと感じる。もしだれも伝えなければ、戦争の恐ろしさを知らないまま大人になる人が増え、また同じ過ちを繰り返すのではないかと怖くなる。また、長崎平和宣言の中で「たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります」と書かれていた部分にも心を打たれた。私は自分一人の力では戦争や核兵器をなくすことはできないと思っていた。でも、被爆者や被団協の人々が証言や行動を積み重ねることで、世界を動かし、ノーベル平和賞にまでつながったことを知り、小さな一歩の大切さに気づいた。私にできることは本当に小さいかもしれないが、平和について考え続けること、周りの人に伝えることも「その一歩」なのだと思う。

今、世界では戦争や対立が続いている。ニュースを見るたびに心が痛むが、長崎平和宣言の言葉を読んで、ただ「嫌だ」と思うだけでなく、平和を守るために何ができるかを考え続けることが大事だとわかった。スポーツ

宣言を読んで、もう一つ驚いたのは「被団協」という団体の存在だった。私は今までその名前を聞いたことがなかった。一九五六年に長崎で結成され、心や体に深い傷を負いながらも、「自分たちの体験を通じて人類の危機を救おう」と立ち上がったと書かれていた。自分が被爆者であるにもかかわらず、未来の子どもたちや世界の平和を守るために行動を続けてきた姿に、心から感動した。一般的に自分の生活や苦しみに精一杯で、他人のために動くのは難しいと思う。しかし被団協の人々は、それでも声をあげ続けた。その信念の強さは本当に尊敬でき、私自身の生き方にも大きな影響を与えるものだった。

長崎平和宣言には「地球市民」という言葉が出てきた。人種や国境を超えて、地球に住む一人の住民として平和をつかっていこうという考え方が多く書かれていた。この言葉を読んで、私はとても前向きな気持ちになった。学校では国や地域ごとに考えることが多いが、本当はみんな同じ地球に生きている仲間なのだと思うと、遠い国の戦争や争いも「自分には関係ない」とは言えない気がした。ニュースで戦争やテロの映像を見ても、つい「怖い



や音楽を通じてつながれること、インターネットで世界中と交流できることも、私たちの世代に与えられた大きな武器だと思う。そうした力を平和のために使えるようになりたい。

最後に、私はこの長崎平和宣言を読んで「長崎を最後の被爆地に」という言葉の重みを強く感じた。戦争を知らない私たちが「戦争は二度とிரらない」と言うのは簡単かもしれない。でも、その言葉に本当の意味を込めるためには、過去を学び、未来へ伝え、今を生きる中で小さな行動を積み重ねることが必要だと思う。私は、山口仙二さんの被団協の人々への思いを忘れず、自分も地球市民の一員として、平和のためにできることを考え続けたい。戦争を知らない世代だからこそ、平和の大切さを伝える責任がある。私はこれからも、この長崎平和宣言を読んだときの感動や決意を胸に刻み、未来へとつなげていきたい。